

カルチュラル・スタディーズ学会

# Association for Cultural Typhoon

## 第6期幹事会後半期活動と

### 2024年度カルチュラル・タイフーンについて

代表幹事 小笠原博毅

学会員のみなさん

あけましておめでとうございます。学会へのご支援ご協力を改めて感謝申し上げます。非常に厳しい幕開けとなった2024年です。戦火の止まないロシア・ウクライナ戦争、パレスチナでのあまりにも非対称な戦闘行為に加え、能登半島を中心に北陸一体を襲った地震によって、大きな被害が出ています。避難はできたものの、困難な生活を余儀なくされている方々が多くいらっしゃいます。学会員の中にも、また受け持ちの学生やその家族などで被災された方々もいらっしゃいます。心よりお見舞申し上げます。

学会からの支援物資送付の呼びかけにお応えいただきありがとうございます。物資運搬作業を申し出てくださいました金沢美術工芸大学の稲垣健志会員、また物資を送ってくださいました会員の方々に厚く御礼申し上げます。稲垣会員からは本ニューズレターにメッセージを寄せていただきましたので、

合わせてお読み下さい。長期戦になるでしょう。インフラや生活の再建がどこまで果たされるのかも不透明です。おそらくさらに何度かの支援のお願いをすることになると思います。どうぞよろしくお祈りします。

2023年度も研究会が盛んに行われました。企画・実施に当たられた研究企画委員会や参加者のみなさん、どうもありがとうございました。当学会が主催したものだけを2023年12月時点で列挙してみますと…

・荒井悠介『若者たちはなぜ悪さに魅せられたのか——渋谷センター街にたむろする若者たちのエスノグラフィ』(晃洋書房) 刊行記念研究会「エスノグラフィの魅力: その意義と新たな可能性」、2023年5月6日、明治大学和泉キャンパス図書館ホール

・ガルギ・バタチャーリヤ『レイシャル・キャピタリズムを再考する』(人文書院) 刊行記念ダイアログ「レイシャル・キャピタリズム、フェミニズム、ブラック・ライブズ・



マター」、2023年7月2日、石引パブリック、金沢)

・アンジェラ・マクロビー『クリエイティブであれ——新しい文化産業とジェンダー』(花伝社) 読書研究会、2023年7月23日、東京大学本郷キャンパス福武ホール

・阿部潔『シニカルな祭典：東京2020オリンピックが映す現代日本』(晃洋書房) 刊行記念イベント「新しい戦前／中の祭典—東京オリンピックを捉え返す—」2023年8月8日、早稲田大学早稲田キャンパス

・「Who Is Ariel?: 2023年版『リトル・マーメイド』をカルチュラル・スタディーズの視点で考える」、2023年12月2日、明治大学和泉キャンパス図書館ホール

・「ハマスの越境攻撃の衝撃とその余波—イスラエル社会の強硬姿勢を支える政治文化的背景を読み解く」、2023年12月6日、神戸大学国際文化学研究所

昨年9月に行われた早稲田カルタイ以後(山本敦久会員の寄稿をお読み下さい!)、秋は少しおとなしかった学術活動ですが、次第に元のうねりを取り戻しつつ、今後も多くの研究会や書評会が予定されています。この他にも共催や協力を含めると月に2,3回の頻度で何らかの集いが行われてきました。特に若手教員の著書や訳書の書評会、またポストク世代研究者による発表など、裾野の広がりを実感する2023年度でした。

さて、2024年のカルチュラル・タイフーン神戸大会の実行委員会が発足し、すでに2回開催されました。いよいよ準備開始です。テーマは「イカリを上げる」。カタカナの「イカリ」は、「錨」と「怒り」の掛詞です。英語にすると“Anchor/Anger Aweigh”。「錨」を上げることは船出を意味します。しかし、正

確な海図と精度ある航海術がなければ船は漂流してしまいます。錨を上げたところで、人口減と高齢化、基幹産業の衰退にあえぐかつての大港湾都市神戸で暮らす私たちは、社会の深部にじんわりと染み込んできている格差やヘイトや閉塞感への「怒り」を言葉や態度に明確に表す(「上げる!」)ことによって自分たちを導く航法をどのように作り上げ、共有することができるのでしょうか? もちろん、神戸だけの問題ではありません。顔を突き合わせ、具体的な経験を持ち寄り、現実なる思考を突き合わせ、「漂流も悪くはないなあ」などと少し夢ある空想とともに、「怒り」を携えつつ「錨」を上げて、眼前に広がる海原をどうやって航海して行こうか、一緒に考えたい。港町での開催ですので、そんな願いを込めてこんなテーマにしました。

神戸デザインクリエイティブセンター KIITO と水道筋商店街を会場とする二極分散開催という初めての試みです。他にも神戸ならではの会場を周辺に数か所押さえてあります。個人発表、グループ発表、プロジェクト・ワークスなど、プログラムは通常どおりです。公募日程やその他詳細は、学会HPを通じて改めてみなさんにご報告しますので、お楽しみに。

学会という制度化によって一応の市民権を得て漕ぎ出してから10年経ちました。カルチュラル・スタディーズはしっかり航海できているのでしょうか? 密やかでも激しくても、静かでも荒ぶっていても、「怒り」は抵抗と批判を導くものであるでしょう。カルチュラル・スタディーズの言葉は、活動は、態度は、その導きの力となっているのでしょうか? 合わせて問う機会にしたいものです。



### 第 6 期第 3 回幹事会議事録

日時：2023 年 6 月 5 日午前 10 時～正午  
出席者：小笠原、菊地、田中、竹田、川端、  
山本、井上  
欠席者：なし

#### □学術交流（代表幹事）

・Inter-Asia Cultural Studies Summer School と  
カルチュラル・タイフーンとの、今後の連携  
の可能性について意見交換をおこなった。

#### □研究企画委員会

・7 月から 8 月に企画されている研究会の  
概要について幹事会に報告がなされた。  
・若手会員を対象とする研究会の開催はカ  
ルチュラル・タイフーン 2023 の開催の後と  
することを確認した。

#### □編集委員会

・年報第 11 号の編集の進捗状況が編集委員  
長から報告された。

#### □大会委員会

・開催校実行委員会での検討内容が幹事会  
に報告された。  
・早稲田大学の 16 号館の使用が大学側の都  
合で難しいことがわかり、14 号館を使用し  
て開催することを了承した。

・シンポジウムの企画状況について報告が  
なされ幹事会として検討をおこなった。

#### □ジェンダー平等推進委員会

・アンケートの回答結果の集計結果が幹事  
会に報告され、集計結果について総会で時  
間をとって公表することを確認した。  
・アンケートの回答結果を踏まえ、学会と  
して今後、包括的ガイドラインの作成を進  
めていくことを幹事会として確認した。

### 第 6 期第 4 回幹事会（臨時幹事会）議事録

日時：2023 年 8 月 21 日午前 10 時～正午  
出席者：小笠原、菊地、田中、竹田、川端、  
山本、井上  
欠席者：なし

・総会の議事内容と式次第を幹事会におい  
て検討のうえで承認した。

・カルチュラル・タイフーン 2023 の当日ア  
ルバイトの時給を 1,200 円とすることを確  
認した。

#### □ジェンダー平等推進委員会

・包括的なガイドラインの作成に際しては、  
障がいのある会員への配慮にかんする規定  
を盛り込む必要について幹事会に報告がな  
された。

### 第 6 期第 5 回幹事会議事録

日時：2023 年 12 月 4 日午前 10 時～正午  
出席者：小笠原、菊地、田中、竹田、川端、  
山本、井上  
欠席者：なし

・2024 年度のカルチュラル・タイフーンの  
開催場所を神戸とすることを幹事会におい  
て確認した。

・学会の大会委員会と開催校実行委員会と  
の役割分担、開催テーマ、プロジェクトワー  
クスの担当の仕方について検討をおこなっ  
た。

・【事務局追記】年報第 12 号の査読体制に  
ついては、メールによる意見交換を幹事会  
において継続的におこなった。



カルチュラル・スタディーズ学会 2023 年度  
総会

場所：早稲田大学早稲田キャンパス 14 号館  
501 教室

日時：2023 年 9 月 2 日 11 時 30 分～12 時 30  
分

代表幹事挨拶

議長選出

・山本敦久会員を議長とする幹事会案が承認された。

第 1 号議案 事務局・委員会報告

・会員数の動向が事務局から報告されるとともに、年報第 11 号の発行が編集委員長から報告された。

第 2 号議案 2023 年度若手研究会活動助成について

・今年度の 3 件の採択と採択額が事務局から報告された。

第 3 号議案 カルチュラル・タイフーン 2022 収支報告について

・事務局から収支報告がおこなわれた後、監査から監査報告がなされた。本議案は総会において承認された。(本ニューズレター 5 頁に掲載)

第 4 号議案 2022 年度収支報告について

・事務局から収支報告がおこなわれた後、監査から監査報告がなされた。本議案は総会において承認された。(本ニューズレター 6 頁に掲載)

第 5 号議案 2023 年度予算案について

・事務局から予算案の報告がおこなわれた。本議案は総会において承認された。(本ニューズレター 7 頁に掲載)

第 6 号議案 ジェンダー平等および多様性に関するアンケート報告

・ジェンダー平等推進委員会からジェンダ

ー平等および多様性に関するアンケートの結果報告がおこなわれた。

・実施期間は 2023 年 3 月 13 日～4 月 10 日 (342 名に送信)、2023 年 4 月 13 日～4 月 27 日 (324 名に送信)。119 名からの回答があった。

・ハラスメント対策に関しては、ジェンダーに限らず他の要素についても考慮した包括的なものであるべきであり、外部の専門家等に依頼し、会員の安全が保障されることが重要であるという意見が見られたことが報告された。

・ジェンダー以外の平等性の確保も重要であり、学会の家父長制的風習や上下関係、ホモソーシャル的関係を改善してほしい旨の要望が寄せられたことが報告された。

議長解任

カルチュラル・タイフーン 2023 実行委員会委員長挨拶

・浜邦彦委員長から参加者への御礼の挨拶がおこなわれた。

閉会



## 第3号議案 カルチュラル・タイフーン 2022 収支報告

## カルチュラル・タイフーン2022(成城大学)収支報告

&lt;収入の部&gt;

項目		備考	
報告登録料	358,000	50名	
成城大学グローバル研究センター支出分	425,000	S-4の支出に充当	
当日参加費	オンライン視聴参加費※ 受付での現金による支払い	1,389,627 6,000	チケット購入者476名(一般267名、学生209名)、グッズ付販売含む 一般1名、学生1名
	小計	1,395,627	
グッズ販売収入		127,800	
合計		1,881,427	

※ Peatix手数料等を差し引いた最終的な収入額

&lt;支出の部&gt;

項目		備考
開催標準備費(S-1)		0
会場費(S-2)		0
オンライン配信費(S-3)	1 配信委託料 2 配信スタッフ雇用 3 配信補助スタッフ雇用 4 配信用機材レンタル料 5 配信用機材購入費 6 Gather.Town契約料	200,000 30,000 1名 24,200 4名 33,000 有会社一脱舎 3,667 139,227 \$980, Nonprofit Subscriptions
	小計	430,094
謝金(S-4)	1 P42登壇謝金 2 基調講演登壇謝金 3 基調講演通訳料 4 基調講演資料翻訳料 5 シンポ①登壇謝金 6 シンポ②登壇謝金 7 シンポ②通訳料 8 シンポ③登壇謝金 9 翻訳謝金	100,000 成城大学グローバル研究センター開催パネル(成城大学支出) 60,000 Angela McRobbie氏への支出(成城大学支出) 40,000 2名に各20,000-支出(成城大学支出) 55,000 報告論文の翻訳(成城大学支出) 30,000 2名1団体に各10,000-支出(成城大学支出) 40,000 2名に各20,000-支出(成城大学支出) 80,000 2名に各40,000-支出(成城大学支出) 20,000 2名に各10,000-支出(成城大学支出) 25,000 開催趣旨文の英訳
	小計	450,000
人件費(S-5)	1 会場スタッフ雇用費 2 実行委員会事務局人件費	105,600 時給1,100-により13名の学生を雇用 192,188 3名にたいして事務局手当50,000-と交通費を支出
	小計	297,788
宣伝費(S-6)	1 プログラム作成委託料 2 プログラム作成補助雇用 3 デザイン謝金 4 ポスター印刷費	110,000 36,000 3名に支出 30,000 16,209 A2、100部
	小計	192,209
事務費(S-7)	1 事務用品購入費 2 郵送料 3 資料印刷費	5,182 4,630 670
	小計	10,482
グッズ関連費(S-8)	1 グッズデザイン料 2 グッズ作成費 3 グッズ郵送料	24,000 138,639 7,320
	小計	169,959
銀行振込手数料等学会負担分(S-9)		5,145
雑損失(S-10)		0
合計		1,555,677

開催収支残金	325,750
--------	---------

上記のとおり報告します。

2023年 8月24日  
カルチュラル・スタディーズ学会幹事(事務局担当)

井上 弘貴

上記の会計報告が適正に処理されていることを報告します。

2023年 8月24日

同 監査

張 瑋 彦

同 監査

岩 崎 鏡



第4号議案 2022年度収支報告

カルチュラル・スタディーズ学会 2022年度収支報告

2022年4月1日～2023年3月31日

<収入の部>

項目	2022年度	備考
繰越金	2,079,959	
会費		
年会費		
個人会員	1,968,106	複数年度の支払者含む
法人会員	0	
賛助会員	0	
その他	7,608	PayPal振込手数料
小計	1,975,714	会費納入件数226件(会費納入率68%)
事業収入		
年報販売収入	0	
その他	0	
小計	0	
その他		
CT関連費	325,750	2022成城カルタイ収支残金
短期借入金	0	
小計	325,750	
利子	9	
合計	4,381,432	

<支出の部>


項目	2022年度	備考
事業費		
研究会開催費	7,554	
年報バックナンバー発行関連費	18,040	創文企画(80件の郵送代行費)
年報第10号発行関連費	830,852	創文企画(編集・印刷費、郵送代行費)
CT開催準備費	0	
若手研究会活動助成費	80,000	5件に助成
小計	936,446	
管理費		
事務局運営費	360,000	事務局手当30,000×12か月
会員管理システム委託費	330,000	(株)アトラスSMOOSY利用料(2022年度)
会議費	0	
通信費	19,239	サーバー使用料、ドメイン使用料
雑費	10,083	PayPal・ゆうちょ振込手数料
小計	719,322	
その他		
選挙管理費	29,150	(株)ジャンボに集計委託
その他	0	
小計	29,150	
合計	1,684,918	

次年度繰越金	2,696,514
--------	-----------

上記のとおり報告します。


2023年 8月24日


カルチュラル・スタディーズ学会幹事(事務局担当)

井上 弘貴 

上記の会計報告が、適正に処理されていることを報告します。

2023年 8月24日

監査 張 瑋 容 

監査 岩 崎 稔 



## 第5号議案 2023年度予算案

## カルチュラル・スタディーズ学会 2023年度予算案

2023年4月1日～2024年3月31日


## &lt;収入の部&gt;

項目		2023年度	備考
繰越金		2,696,514	
会費	年会費	個人会員A	1,040,000 104名を想定にして算出
		個人会員B	138,000 23名を想定して算出
		個人会員C	444,000 111名を想定して算出
		法人会員	0
		賛助会員	0
	小計	1,622,000	現在の会員の65%が納入したと仮定して算出
事業収入	年報販売収入	2,000	
	その他	0	
	小計	2,000	
その他	CT関連費	0	早稲田カルタイ2023収支の結果による
	小計	0	
合計		4,320,514	

## &lt;支出の部&gt;


項目		2023年度	備考
事業費	研究会開催費	120,000	会場使用料、非会員の講師謝金、研究会開催記録執筆謝金
	若手研究会企画運営補助	80,000	公募による若手研究会の企画運営への補助
	年報発行費	900,000	編集・印刷費、郵送代行費、J-STAGE搭載代行費
	CT開催準備費	0	早稲田カルタイでは開催校準備金を設定せず
	小計	1,100,000	
管理費	事務局運営費	360,000	事務局手当30,000×12か月
	会員管理システム委託費	330,000	(株)アトラスSMOOSY利用料(2023年4月～2024年3月)
	サイトリニューアル工事費	300,000	カテル有限会社に発注
	会議費	0	
	通信費	10,000	サーバー使用料、ドメイン使用料
	雑費	10,000	PayPal・ゆうちょ振込手数料
	小計	1,010,000	
その他	選挙管理経費	0	次回の幹事・監査選挙は2024年度に実施
	その他	0	
	小計	0	
合計		2,110,000	
次年度繰越金		2,210,514	

上記のとおり報告します。

2023年 8 月 24 日  
カルチュラル・スタディーズ学会幹事(事務局担当)井上 弘貴 

上記の予算案を確認しました。

2023年 8 月 24 日

監査 張 瑋容 監査 岩崎 絵 



『移民の子どもに隣に座る』の著者の隣に座る書評会（2024年1月9日 神戸大学国際文化科学研究科 E410 教室）

西村風紗

玉置太郎朝日新聞記者を迎え、その著書『移民の子供の隣に座る 大阪・ミナミの教室から』（朝日新聞社、2023年）を学生自身で読み進め、学生側から玉置さんへ向けて論点を出し様々な意見を交換した。論点は三つで、一つ目に支援者の立場から、支援の輪を大きな共同体へと広げていく方法について、二つ目に無償奉仕活動であるボランティアが生活の時間に入ってくる時、対価なしにボランティアを続けていく方法、そして三つ目に新聞記者としての立場から、切り取られた一部の報道によって、誇張された情報が拡散されてしまう現在の報道の在り方についてどう思うかを質問した。

初めの二点の論点に関して、学生にとってボランティアは関心を引きやすく、自分たちの経験と絡めて想像しやすい話題であった。玉置さんのボランティア観としては、やりがいや楽しさを感じる事が第一であり、それに対してしんどい気持ちが先行してしまうことはボランティアのよさを得られていないとの意見をいただいた。ただ、一貫してボランティアに関しての話題では、自分は新聞記者であり、ボランティアにあくまで記録として参加させてもらっている立場であるため、一から組織を成立した人たちには足元にも及ばないとおっしゃっていた。

報道に関しての議論では様々な学びがあった。ボランティアに関してではなく報道や記者としての立場のほうに語れるというのは本当であった。印象に残っている言葉

は、SNS 社会の現代において、ある種読み手の立場を選んでしまう情報は流動性が高く、一瞬で消え去ってしまうという言葉だ。この社会で情報を生き残らせるためには、特段話題性のある事象であることが必要であるという。玉置さんは自身で移民の子どもを支える市民団体については他者の興味を引きつけるのは難しいと言及していた。書籍になるとさらに話題性を呼ぶのは難しい。しかし本は消えることはなく、理解されるときが来るまで目に触れずともずっと残り続けるのだという。書籍にすることで玉置さんの戦いは現在ではなく将来を見据えているかのように思われた。また、本に自分自身が学んできたことを打ち込む姿勢から、玉置さんの現在の報道の在り方に逆らう姿勢が見てとれた。長い時間をかけて書いた記事よりも話題性のある記事のほうが生き残ってしまうこの社会に反旗を翻しているかのような印象を受けた。

本を読むだけでは、ボランティアに関わる人としての印象しか得られなかったため、実際に話を聞いて著者自身の人柄や考えに触れたことはめったにない良い経験であった。移民ボランティアに関して、本来支援を必要とする移民などの対応は、政府が行うべきだと私自身は理解している。ボランティア団体を立ち上げ支援せざるをえない現在の状況は疑問である。しかし、制度を設けるには移民の現状を知る人間があまりにも少なく、この戦いは玉置さんが見据えているように長期をかけて世間に定着させることが必要だ。日本の比較的恵まれた環境と途上国の厳しい現状を知っている私でも、両者の格差を繋ぐための行為として「伝える」ことがあるのだと思った。■





## 学術フェス・カルタイ

大会担当幹事 山本敦久（成城大学）

「学術フェス」——2003年に早稲田大学で動き始めた「カルチュラル・タイフーン」の縦横無尽な軌道は、ときに座礁しながらも、20年の時を経て2023年9月にまたもや早稲田に上陸した。カルチュラル・タイフーンはいつしか「カルタイ」というポピュラーで身軽な略称を翼にして、東アジア圏の若い研究者、ミュージシャン、芸術家、批評家、社会活動家たちと器用仕事（コラボ）しながら、言いえて妙、まさに「学術フェス」と近年では呼ばれるようになった。「学会」という、どこか権威的な振舞いを身体化した者たちの階層秩序化された舞台を奪用（アプロプリエート）し続けたあげく、カルタイは、いわゆる学会にちょっと似ているけど、どうやらまったく違った集合性と身体をもったフェスへと生成変化しているようだ。

今回の早稲田カルタイ取材してくれた朝日新聞の藤谷記者は、記事のなかで次のようにカルタイの性質を描写している。

「会場にはアート作品が飾られ、ラップが流れる。既存の学会やシンポジウムの形式にとらわれず、さまざまな立場の人が自由に集い、対等に対話する「学術フェス」がある。「カルチュラル・タイフーン（カルタイ）」。専門分野の垣根を越えて、いまの社会のありようについて意見が交わされた」（朝日新聞10月23日）。

ネオリベラルに悪変され続けたゼロ年代以降の大学の、まるで企業オフィスのような顔つきとメンタリティを持った校舎（ビルディング）は、学会発表にはおあつらえ向きかもしれないが、フェスには不釣り合いだ。シナリオ通りの型にハマった学術コミュニケーションによって研究を発表し合うのではなく、またSDGs的な振舞いで課題解決シナリオを演じるのでもなく、どうやって多様な差異を持った者たちが可能な限り多様な差異を持ったままに、それぞれが抱えた 이슈を真剣に対話の場にひらいていくことができるのかを試すこと、それがカルタイの色となっている。カルタイはそうやって校舎をフェス会場へと変化させていく。

半年以上かけた実行委員会による準備過程から開催当日までの間、何度も何度も、あちこちで怒りがこみ上げたかとおもえば、笑いが溢れ出し、涙が流れ、言葉と表現が生まれてくる。「このままで本当に当日をうまく迎えることができるのか」ということが、絶えず実行委員のメンバーたちに不安となって襲い掛かる。こんな学会は他にないだろう。まだ誰もやったことのない一回限りのフェスをやるという企画観と期待感。どんな研究者を呼ぼうか、どんなミュージシャンを呼ぼうか、どんな活動家を呼ぼうか、呼んだところでうまく対話が成立するのか。こういうテーマで2023年現在の支配的なあらゆるものに少しでも風穴をあけられるのだろうか。発表者へのヘイトが起きた時、どう振舞うべきか。はたまた現実的な



ところでは、会場の席は埋まるのだろうか、チケットは順調に売れるのだろうか、赤字にならないだろうか…。発表者と参加者たちは、どんな思いと熱量でカルタイを経験するのだろうか。そんなことを絶えず想像しながら、実行委員会のメンバーは、さまざまな仕掛けを創案し尽くして当日を迎える。ここまでくると本当にフェスの舞台裏だ。

金沢 21 世紀美術館で開催した金沢カルタイ (2021)、成城カルタイ (2022)、そして早稲田カルタイは、コロナ禍からポストコロナを繋ぐ過程で、新しい仕掛けを導入してきた。研究対話やセッションをオンラインでの映像コンテンツ (かなり高いクオリティの映像) として学術界の外にまで配信し、それを歴史的アーカイブに蓄積しようとしている。また大学院生や若い研究者、東アジアの留学生たちの感性と表現と思考を積極的に取り込みながら、若い同世代の関心を引き寄せる仕掛けをふんだんに作り出した。さまざまなオリジナルグッズ販売やヴァーチャル空間上でのカルタイ同時開催など新しい試みが現れた。

2003 年以来、カルタイでは絶えずフェミニズムやクィア・スタディーズの研究者や活動家対話の場を作り続けてきたことも忘れてはならない。ここ数年のカルタイは、その痕跡をもう一度再構成して、最前線に押し出そうとしてきた。成城カルタイでは、カルスタのフェミニズム研究を 70 年代から牽引してきたアンジェラ・マクロビーの基調講演を実現し、「雑多なフェミニズム」というテーマのもとで多くのパネルが展開された。今回の早稲田カルタイは、SNS 上で政治的な 이슈 として攻撃に晒されていてなかなかオープンかつ安全な場で議論することが難しい状況に置かれているトランスジェンダーを主要なテーマとしたシンポジウムを行った。藤谷記者の言葉を引用しよう。

「トランスジェンダーに関するシンポでは、「トランスジェンダー入門」(集英社新書) を著した高井ゆと里さんらが登壇し、当事者の言葉や文学作品を通じて、連帯と抵抗の歴史について語り合った。性的少数者への差別やいじめが深刻な社会問題となるなか、6 月に LGBT 理解増進法が成立した。だが、国会議員からは当事者への偏見を助長するような発言が相次ぎ、「全ての国民が安心して生活することができること」という留意事項が加えられた。こうした政治状況に、司会を務めた文学研究者の岩川ありささんは「徹底的にあらがっていきましょう」と訴え、「どうかみなさん、生きて下さい」と呼びかけた」(朝日新聞 10 月 23 日)。

「新しい戦前」もまた今回の主要なテーマだった。このタモリの言葉は、カルタイのなかで新しい戦前とは、けっして終わらない植民地主義とどう向き合い続けるのかという現在の課題に接続された。関東大震災から 100 年という文脈のなかで、在日コリアンのラッパーである FUNI が会場でラップし、飯山由貴さんによる映像作品《In-Mates》が上映された。

学術フェス・カルタイは、多様なスタイルで支配に抗いながら生きるための知と運動を持



ち寄る集まりの一形態に与えられた名前となりつつあるようだ。それぞれの政治的イシューを抱えて集まった参加者が知恵を絞り出し、苦勞して作り上げたあげく、そこでほんのちよっとだけ掴まえかけた希望を大切に共有して、また再び自分の持ち場に帰るというプロセス。スチュアート・ホールと同時代を生き、カルチュラル・スタディーズとは言わずに80年代にカルスタを実践していた文化人類学者の山口昌男は、凝り固まった支配的思考の結びを思いかけず切り開いていく民衆の集合的エネルギーのことを祝祭(フェス)と呼んでいた。学術フェス・カルタイは、今年、港町神戸の中心なき雑多なロケーションに錨／怒りをおろす。そこに下ろされたイカりをどうやって引き上げるのか、そこでどんなフェスの颯風が巻き起こるのか。乞うご期待！

## 能登支援物資の報告と御礼

稲垣健志 (金沢美術工芸大学)

2024年1月1日に起きた大地震と津波により、石川県の能登は壊滅的な被害を受けました。被災された方々の多くは、避難所での暮らしを余儀なくされ、生活に必要な物資が全く足りない状況にあります。1月7日、カルチュラル・スタディーズ学会のMLを通じて、被災地への支援物資を勤務校である金沢美術工芸大学に送ってもらうようお願いしました。その結果、全国の学会員より、飲料水、おむつ、生理用品、毛布など段ボール25箱ほどの物資が届きました。それらは、責任をもって金沢市の指定した集積所に運搬させていただきました。今後、市を通じて、能登半島各地の避難所に物資が届けられることとなります。もちろんこれで終わりというわけではありません。これからも皆さんにはいろいろとご協力いただくこともあるかと思いますが、ひとまずのご報告とお礼を申し上げます。どうもありがとうございました。

2024年1月12日



<出版情報>

2023 年度、ご執筆者あるいは出版社様から学会事務局にご恵贈いただきました著作は下記のとおりです。ここにご紹介申し上げます。

・柳姫希著『あいまい化する〈当事者〉たち——韓国セクシュアル・マイノリティ運動から考えるコミュニティの未来』（春風社、2023 年）。

・マウリツィオ・ラッツァラート著、杉村昌昭訳『耐え難き現在に革命を！——マイノリティと諸階級が世界を変える』（法政大学出版局、2023 年）。

・小玉重夫監修、田中伸、豊田光世編『対話的教育論の探究——子どもの哲学が描く民主的な社会』（東京大学出版会、2023 年）。



**News Letter**  
**Association for  
Cultural Typhoon**

2024 年 1 月 15 日発行 第 2 号

〒657-8501 兵庫県神戸市灘区鶴甲1-2-1  
神戸大学 国際文化学研究科 井上弘貴研究室気付  
association.ct.secretary@gmail.com  
<http://cultural-typhoon.com/act/jp/>